



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ディスカッション
Author(s)	蔵田, 伸雄; 小平, 麻衣子; 高田, 里恵子 他
Citation	応用倫理, 10(Suppl), 34-44
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72184
Type	other
File Information	iscussion.pdf



ディスカッション

蔵田：それでは、質疑応答に入らせていただきます。皆様からたくさんのご質問を頂いています。どの先生への質問かを書いている方もいれば「どなたでも」というものもあります。「どなたでも」というご質問については、こちらのほうで適当に回答する方を割り振らせていただいた上でお答えいただきます。

まず、小平先生へのご質問です。

「文学教育における『鑑賞』一党独裁というお話がありましたが、このような傾向は今後も続くのでしょうか？教育方針の見直しなどは行われていないのでしょうか？」

小平先生、いかがでしょうか。

小平：鑑賞一辺倒の文学教育のやり方というのはもちろん、少しずつ変わってきていると思います。そういうやり方に対して批判のある世代が出てきて久しいです。今の研究というのは、ポストコロニアル批評やらジェンダー批評と言われるようなものや、そしてその後もさまざまなものが出てきているので、国語教育も連動していると思います。しかしそれよりも、もしかすると国語教育の中では、もはや今は文学教材というのはどんどん縮小されて、読む、書くというよりはコミュニケーションの能力を高めるといったほうに比重がかかっているかもしれません。ですから、文学教育が今後うれしいような形で変わっていくのを私たちが見られるのかどうか、そこは少し難しいかもしれないと、ちょっと悲観的な感じもいたします。

ただ、先ほど話をはしょってしまったのですが、鑑賞ということを言いだしたのは、日本の近代文学研究の、ほかの領域からの独立という意味合いもあったと思うのです。歴史に従属する〈文学史〉とか、社会の階層を分析する歴史社会学の〈援用〉としての文学研究、そういったものとは違って、独立して美とか心情というものを考えていく——すなわち、日本近代文学というものが学問として独立する一つの要素を強く打ち出したということでもあったので、悪いことばかりでもなかったと思います。ただ、さきほど申し上げたように、世間での文学の価値自体が変わってきていると、文学部とか、その中での日本文学科みたいなものが、これまでのような組織としては独立を保ちにくくなり、逆に学問の形式を変えていくということも起こっていると思います。

蔵田：高田先生にもご質問を頂いています。

「現在でも『学校の勉強なんかしない』ことがカッコイイという風潮は残っていると思いますか？」

一つ目のご質問ですが、いかがでしょうか。

高田：ある一定の高校ではそうした風潮が残っているのではないかと、私は疑っています。麻布



討論の様子

とかね……あ、また言ってしまいましたけれども。(笑い) そういう高校ではいかにも、「受験勉強はしない」みたいな……。受験勉強を全然しないというわけにはいかないのですけれども、エリート高校だと言われている学校では、今でも「受験勉強なんかしない」という態度は残っているのではないかと思います。ただ、現在はもう、とにかく医学部に行って医者になれば安定した職業はないといった変な受験の世界になっていますから、少し変わってきているのでしょう。理系の人間はわりにヒネくれていなくて、「受験勉強なんかしない」といった態度を出さないかもしれないから、そのあたりは微妙なのですから、エリート校と言われているところでは、「受験勉強なんかしない」というような「ふり」といいましょうか、それはやっぱり残っているのではないのでしょうか。

受験（勉強で身に付く学力）は真の学力ではない、という考えが日本にはあります。私は以前、「地頭（じあたま）がいい」という言葉を知らなくて、「地頭（じとう）って何だろう。鎌倉時代か、ここは」と思っていたことがあります。(笑い)

地頭がいいというのは圧倒的にいいことだと多くの人が思っています。「あいつ東大へ行ってるけど、地頭はあまりよくない」という言い方もします。こういうのを例えばドイツ人とかに説明しようとしたら、大変難しい。日本にはもともと、学歴があるとか受験勉強の勝者であるとか、そうした「括弧付きの才能」の持ち主とは違う「真に頭がいい」人というのがいる、という考えがあるのでしょうか。興味深いです。ですから、「受験勉強なんかしない」といって頑張っているエリート高校の17才などは、「早く大人になれよ」という目で優しく見てあげつつ、クールな考察の対象にしたいと思っています。

蔵田：会場に麻布高校などのご出身の方がおられたら、その辺のところを、後でこっそり教えていただきたいと思います。(笑い)

高田先生にはもう一つ、ご質問があります。

「ご報告の後半に言及された、女性の教養と道德の関係を裏付けるような例（人物や作品など）がありましたら教えていただきたいと思います」

高田：平石先生が扱った『虞美人草』の藤尾もやっぱり、道德を破ろうとしています。つまり、父が決めた結婚の約束を破ろうとしているわけです。また、よく知られていることですが、

小野さんと待ち合わせて、今で言うところのラブホテルに行こうとしていて、性道徳を破ろうとしているわけです。

そして、実在の人物は何と言っても、すでに先ほど挙げましたが、平塚らいてうでしょう。彼女も外国文学を英語で読むわけです。水溜先生のお話で、向学心ある貧しい少女がゲーテとかハイネとかの「外国の人たちの本」に触れる感激体験が出てきましたが、ハイネなんて相当に不道徳ですよ。要するにこうした西洋文学を読むというのは、何か自分とは違う……今、いろいろなものに縛られている自分とは違う……そこで解放を求めた主人公はしばしば惨めに没落してしまうのだけれども、何かそうした没落に触れるというような体験だと思うのです。『ウェルテル』だってそうです。ゾラの『ナナ』だって売春婦ですからね。だから、女の人が文学を読むこと自体が、半分墮落なのです。しかし、“墮ちる”ことがまさに自分自身になるということなのではないか。これを私は「墮ちたお嬢さん」と呼んでいるのですけれども、女性にとって自分自身になるというのは、“墮ちる”ということですよ、いろいろな意味で。しかし、単なる墮ちた、貧しい女子だったらそれっきりなのだけれども、やっぱり“お嬢さん”でなくてはダメなのです。平塚らいてうの家もお父さんは高級官僚だし、藤尾の家は外交官です。高等女学校というのは初期の場合、やっぱりお嬢さんでないと行くことはできない。今は「本を読みましょね」と言いますが、明治40年ぐらいまでは、今、「ゲームばかりしてはダメ」と言うのと同じように「本ばかり読んじゃダメ」ということで、文学は一種、墮落の原因みたいに考えられていました。

墮ちたお嬢さんの系譜の物語……私は国文学者ではないから、はっきりしたことは言えませんが、「墮ちたお嬢さん」の話は少なくない。人物としては平塚らいてう、作品としては『虞美人草』とか、小栗風葉の『青春』ですが、高等女学校卒の女子をテーマにしている、みんな墮ちています。上野千鶴子さんだけが墮ちているわけではありません。(笑い)

蔵田：次に、「だれでも」ということで来ている質問です。

「女性が教養から排除されてきたという経緯はわかったのですが、昔の男性はなぜ女性を排除してきたのでしょうか。例えば、教養の側にいることで特権意識を内包した男性たちの中でホモソーシャルな関係性を構築することが彼らにとり心地よいものだったからなのでしょうか」

「普通に考えれば男性ばかりの世界に女性が入ってくることは、男性にとって望ましいことであるように思えるのですが、私の考える〈普通〉はむしろ特殊なのでしょうか。あるいはそれは新しい世代特有の感覚なのでしょうか」

これは旧制高校が男の世界であったということともかわっていくと思うのです。これは「だれでも」というご質問ではあるのですが、軍隊に関する著作もおありの高田先生にお答えいただきたいと思います。

高田：女同士とか男同士だけにいるほうが、プライベートで言えば私は楽しいですね。女4人ぐらいでワーワーと話しているところにぽつっと男の人が1人来たりすると、やっぱりちょっとは緊張して違う話になってしまいます。「文学」などの話とは離れて、本当のことを言うと、男同士で話したり女同士で話したりしているほうが楽しいというのは、多分そうではないかと、申しわけないけれども、個人的には思うわけです。ですから、旧制高校の世界で男同士で話したり、い

ろいろと人生の問題を語り合ったりするのは楽しかったらうなと想像するのです。そのことは女性の排除というよりは、女性はいつも外側にいて、青年期ですからもちろん恋もするわけです。決して女性とのつきあいを排除していたわけではない。女子ホモソーシャルでも男性ホモソーシャルでも、男同士で話して面白い、女同士で話して面白い、気も遣わないでいいし楽しいというのは、普通にあることではないかと思います。

ですから、老紳士たちが旧制高校のことをすごく楽しかったと振り返るときには、それをホモソーシャルと呼んでいいのかどうか分からないのですけれども、男同士でちょっと本音を話し合える、それが楽しかったということではないでしょうか。本音をなぜ出せるかということ、選ばれたエリートだけの世界だからです。それは、いろいろな旧制高校の思い出記を見て、そうだったんだろうなと想像できます。

蔵田：私は専門が哲学なので、「哲学は男の世界」といった言い方はすごく分かります。ただ、私は男ばかりでいるというのは好きではなく、女性が入ってきたほうが楽しいと思うのです。

それで、平石先生にもご質問を頂いています。

「近代の女性の教養は西洋のもののみならず、伝統的なものもその範囲に入っていると考えておりますが、当時の女性を排除するシステムの中でこの二つの関係はどのように考えるとよろしいでしょうか。もし平石先生からお考えがあれば教えていただけないでしょうか」

教養というと、「漢語が読める」といった要素もあると思うのですが、平石先生のお考えを伺いたいと思います。

平石：私は、専門が比較文学といっても西洋のものとの比較ということなので、あまり漢学のことはやっていません。ただし漢学というのは基本的には男性のものとされていたわけです。女性の伝統的な教養といったときには、それは女大学的なものであったり、あるいは芸事的なことであったり、あるいは今で言う家事に分類されるようなものだったと思います。その違うものを教養と言っていたときには、そこは住み分けていたので、「女性を排除するシステム」との相性はよかったわけです。

ところが、明治になって、全部が同じになるわけではないのですが、同じものができてきます。私は「男性が女性に教える」という話をいたしました。それはジェンダーロールということと、ジェンダー間の力関係に関わる問題です。男性たちにしてみれば、女性に対して自分たちが優位な立場——これは異性愛的な枠組みとも関係するわけですが——にいるということが心地よかったわけですね。わりと最近のことですが、「マンスプレイン (mansplain)」という言葉がアメリカ発祥で流行りました。マンスプレインとは、男の人が女の人に何かを教えたがったり、説明したがる、ということです。それは恐らく今日の教養主義という話題とも関連する、男性たちが男性優位の男女の関係性を築こうとする、ということだと思います。男性と同じ教養を女性に授けてしまうと、男性たちは自分の地位を脅かされると思う。だから、そのところを分けたいという欲望が、明治時代には厳然としてありました。ただしそこに反抗した女性たちが——私の説だと——文学からけっこう勇気をもらっていたのではないかと思います。男性が書くファンタジーから勇気をもらって、平塚らいてうのような女性が出てきたのではないのでしょうか。

『虞美人草』の藤尾についても、野上弥生子は「藤尾はいい」と書いています。夏目漱石は「あれは悪い女だ」、「だから最後に殺すんだ」と言っているのですが、野上弥生子は「藤尾さんにあこがれた」と後で言うわけです。そうした男女の捉え方の違いはあると思います。

蔵田：平石先生にはもう一つ、質問が来ています。

「『浮雲』におけるお勢の読んでいた英字のテキストが“女性向け”のものではなく、男性と同等であったということについて。そこから何がどう作用して、女性向けの外国語とか（教養化？）が出てきたのか？『女学雑誌』との関係など、(good wife/wise mother)の巧妙さなどが関係しますか？」

「また、『浮雲』のみでなく『藪の鶯』も教養ある女性はそうですが、女性を差別する、という構造についてどのように思われますか？」

平石：まず、一つ目のご質問についてです。ここは私も本当はもっと調べなければならないところなのですが、もともとは女性向けの英語のテキストはなかったということだと思うのです。だから『ナショナル』の『フォース』など、もともとは中等教育を受けている男性のためにあるものを、女性の一部も勉強するという形です。ただし、それを教えるのはそれを勉強し終えた男性という形で、そこに位相をつけていくということがあると思います。

でも、それが恐らくどこからか——そこはまだ調べていないので分からないのですが——例えば、高等女学校向けの英語のテキストみたいなものができてくるのではないかと思うのです。そのところはこれからやっていくと面白いのではないかと思います。そこでは当然、内容も……例えばスイントンは世界の歴史なわけですが、そうではなくて、例えばご質問いただいたような、まさに good wife/wise mother というものにかかわる形のテキストが選ばれていくということがきっとあると思います。それがいつごろから始まるかということは、私もこれから調べていかなければならないことだと思います。

もう一つ、『藪の鶯』についてご質問を頂きました。この作品については、「師である坪内逍遙が手を入れた」とも言われています。その中で三宅花圃がどこまで自主規制をしたのか、あるいは先生から言われて直したのか、そこは分からないのですが、三宅花圃自身のある種の限界といいますか、欲望は持ちながらもそういう女性たちが結局どうなったか、それを明らかにしないままで終わるしかなかったのが『藪の鶯』です。例えば、田村俊子の『あきらめ』でも、何だかんだ言いながら結局はあきらめる、というふうに物語が終わらざるをえません。そこは、その当時の女性たちがどこまで書けるかということともかかわってくるのではないかと思います。少なくとも三宅花圃はそれは書けませんでした。女性向けにしても書けなかったということです。それは当時の女性たちにとって不幸なことだったのかもしれません。ただ、早い段階でそういうものが出ただけでもよかった、と考えたほうがいいのではないかとはいっております。

蔵田：今回の企画にかかわる、かなり本質的なご質問が二つ来ていますがまず一つ目です。

「おそらく多くの方の質問が出るとは思いますが、『君たちはどう生きるか』が人気です。これも教養主義的な書物と考えます。『赤頭巾ちゃん気をつけて』等もそうですが——」

ところで、『赤頭巾ちゃん気をつけて』という作品を、若い学生さんはご存じでしょうか。1969年に発表された、庄司薫という作家が書いた小説で、ベストセラーになったのですが、今の学生は全然知らないという本です。

質問を続けます。

「——若い人への啓蒙文学は読者として女性を想定していないようです。今この時代に『君たちは〜』が受け入れられている理由についてお考えをお聞かせください」

今回このような企画を立てて4人の先生方にお話をお願いしたのですが、実は私自身が気になっているのは、『君たちはどう生きるか』にしても『赤頭巾ちゃん気をつけて』にしても、これらの作品は男の子はどう生きるべきか、しかもエリートの男の子はどう生きるべきかという問題を扱った作品だということです。『君たちはどう生きるか』の主人公のコペル君はエリート校の男の子です。『赤頭巾ちゃん気をつけて』という作品は、安田講堂での攻防に象徴される東大の紛争のせいで入試が中止になってしまったという状況で、東京大学を受験しようと思っていた主人公の男の子が大学進学をやめるべきかと悩むという話です。ここには、人はどう生きるのかという問題について考えるのは、そして人生について悩むのは男の子の特権なのかというジェンダー的な問題があるのではないかと思います。ところが、この企画を考えたときには予想もしていなかったことなのですが、『君たちはどう生きるか』はもう何十万部と売れているのだそうです。

では、なぜ『君たちはどう生きるか』が受け入れられているのでしょうか。先ほど、打ち合わせを兼ねたおしゃべりの中でいろいろなお意見が出ていたのですが、高田先生、いかがでしょうか。

高田：『君たちはどう生きるか』がなぜ売れているのか、私のほうこそ聞きたいという感じです。蔵田先生が「エリートの男の子はどう生きるか」とおっしゃっていましたが、コペル君も庄司薫君も家は大変お金持ちなのです。そこが重要なところですね。コペル君は高等師範学校附属の中学に行っていて、そこは当時からお金持ちの坊っちゃんの中学校だった。『赤頭巾ちゃん気をつけて』の場合は、社長の息子です。家にお手伝いさんがいる。『君たちはどう生きるか』と『赤頭巾ちゃん気をつけて』の構造は似ています。コペル君にはお父さんがなくて、お母さんの弟、すなわち叔父さんと、ノートを通して語り合います。薫君には年の離れたお兄さんがいて、お兄さんとその友人たちとの回覧ノートを覗いたりして知的刺激を受けている。『赤頭巾ちゃん気をつけて』は、『君たちはどう生きるか』をある程度意識しているのではないかと思います。そうするとここで重要なのは、恐らくコペル君はやがて東京帝国大学に行くと思いますが、男の子というだけではなくて、何もかもに恵まれたお金持ちでエリートの「君」がエゴイストにならないでどう生きるか、ということです。「ノブレス・オブリージュ」に関係してきます。

吉野源三郎も、お父さんが株屋さんか何かで、やっぱりすごくお金持ちなのです。東京高等師範学校附属中学出身ですから、自分のことをある程度書いていると思うのですが、そこで貧しい豆腐屋さんの同級生の話などが出てきます。吉野源三郎自身も治安維持法に引っかかっていますし、当時は1937年に日中戦争が始まってという状況で、どんどんどんどん世の中がおかしくなっているということを意識していた時代なので、現在売れている理由はそこかなと思います。時代がおかしくなりつつあるというところが、ちょっと似ている。あとは、読んでいて、あまりのブルジョワぶりに、バカヤローというか、チェッ!とか、本当にそんな感じがします。

本が売れるときには常に、何かどこかに大きな誤解が生まれて売れるのではないか。ですから、本当にこの質問については、どこに誤解があるのか、ぜひ教えていただきたいと思うぐらいです。

小平：阿部次郎の『三太郎の日記』なども、案外、今の学生に読んでもらおうと共感されるのです。こちらは批判するつもりで、授業などではややふざけた態度で読むわけですがけれども。作品では、「それぞれは個性を発揮しなくてはいけない」とか、それぞれの人が個性的になればなるほど普遍に近づいていく、ということなどを述べています。今に限らないと思うのですけれども、個性は発揮したいけれども社会から外れたくないという向きには、それぞれの人がそれぞれの人格を伸ばしていけば、みんなが個性的になるのだから普遍に近づいていく、といったことを言われると、非常に安心するのだと思うのです。

さて、社会では、従来は男性が制度の中で悩むことが多かったから、男子の「悩み本」というものが多くなっていて、女性のほうは、特定のところに入ろうと思っても入れないという社会制度のせいで、あきらめを持っている、つまり、できることとできないことは自分の中ではっきりと整理してしまうという癖がついていて、それであまり悩み本というのがないのだと思います。ただし、現在では女子学生も「私は受験の中でこうしてやってきて、『三太郎の日記』を読んだら、ちょっと共感してしまった」なんて言いますので、それはもうどんどん変わってきていることだと思います。

蔵田：お金持ちになった男性、あるいは親がお金持ちの男性がさまざまな因習から解放されて自分らしくなるということが教養主義の中心的なポイントだったとすると、その点は現代ではどうなのかということが問題になります。そこで最後のご質問を紹介します。これは、「だれでも」というご質問だと思います。

「『教養』が、近代化する日本で、上昇移動を果たした人々（男）の間での差異化の道具であり、メカニズムだったということだと理解した」

「一方で啓蒙主義以降の因習からの解放の契機をもたらす個人主義形成の力でもあるとすると、やはり今に生かせる文化的装置でもあるのではないか」

「ニューアカで教養が終わり、男による独占も終わったのか。であれば今ジェンダー的問題はあるか。むしろ世間的道徳と闘うのに必要になる??」

さて、いかがでしょうか。

平石：教養主義が男性だけに利をもたらしたのかというお話は、水溜先生のコメントの中でもありました。私も言いたいこともあるのですが、それについては後回しのほうがいいかもしれません。『赤頭巾ちゃん気をつけて』の薫君が共学の日比谷高校に通っているながら、日比谷高校の女の子の話が作品にほとんど出てこないことが、私は非常に面白いと思いました。高校は本当にホモソーシャルな世界であり、薫君のガールフレンドは別の学校にいて、お嬢様という設定になっているわけですね。

先生方のお話を伺って、私自身がいかに教養主義というものにどっぷりつかってきたか、そういう家庭教育なり学校教育を受けてきたのかということに、愕然としました。一方で、教養主義

というのはエリート主義とも大いにかかわってくると思うのです。エリート主義というものが打破されてしまった、今の日本や世界がいいのか、という問題です。アメリカでは今、知識人の言葉は信用されなくなって、それで今のトランプ政権があると私自身は思っています。しかし、それが果たしていいのかと考えたときに、私がどっぴりつかってきたからかもしれませんが、教養主義というのは悪いことばかりではない、やっぱり教養は大事だと思います。ただ、「人格形成に役に立つ」などと言われると、そもそも人格者になる必要があるのかという問題になってきます。私自身はそこには反対で、人格者になる必要があるかどうかは分かりません。それよりも、高田先生のお話にもありましたが、教養を身に付けることによって人の言うことを丸のみにしない、自分で考える力をつける——それはジェンダー差異がない形だと思うのですが——という意味での教養は、これからも非常に重要なものとして働くのではないかと考えています。

高田：私も、「括弧付きの学問」から離れて言うのですけれども、若い人たちには現在でも、男女にかかわらず、何かの殻を破って自分自身になりたい、解放されたいという気持ちがあると思います。それは若い人たちだけではありません。私は、今でも心は本当に18歳なのですから、年齢にも世代にも関係なく、何とかして「自分自身になりたい」という気持ちがあります。しかしこうした気持ちは、ある人となない人がいます。それは性格だと思います。一定数の割合で「教養」を求める者はいるのです。それが読書による教養なのか、自分自身の職業を見つめ続けることによる教養なのかよく分からないのですけれども、殻を破りたいという気持ちは生涯持ち続けるのだらうと思います。私も、いまだにいろんなものに怒ったり、チェッ!と言ったり、暴れたりして、いって、「もっと大人になれよ」と自分に言っています。(笑い)

小平：同感です。教養が自分の頭で考えて周囲を批判していく力だとすると、知識も知的な訓練も重要に違いありません。ところが、それが教養主義として、ある地位の独占のような、あるいは資本の独占のようなものとつながるから、それが批判されるべきことになるということだと思います。

私も若いときは、今日お話しした、よけいな女子大生みたいなものだったと思います。自分のできも悪かったと思いますが、女子であること、専門が、外国語も古典もない日本の近代文学であったということ、私立であったことなど、社会の中での固定されたイメージが理由ではなかったかと考え、それらを明らかにする研究をしてきました。ただし今、それなりに大学の教授になりましたので、「そういう地位に安住して、おまえも『教養というのはやっぱり大事だ』と説くようになったのか」などと言われるのも嫌だなと思います。ですから、自分で批判していくような論文をさらに書き続けたいと思います。

それから、水溜先生が言われたのですが、私は、どうして中流以上の女子の話しかしないのか、と批判をいただくことがあります。下層の階級であっても、いや下層の階級であればこそ、何かを学ぶことの喜びというのは大きく力になることがあるので、今日のように学ぶことのネガティブな側面だけでなく、そうした研究の必要性を言われるのです。全くそのとおりで、今のところ私の能力と時間がそこまで追いついていないだけなので、今後はそういった方面にも領域を拡大して、いろいろと勉強していこうと思っています。

水溜：これまでの教養のあり方は、男性中心的、エリート的だったという点では批判されなくてはいいと思います。けれども、先ほどもお話ししたとおり、教養は、社会を批判的に見る力につながるという意味では、非常に重要なものだと思います。ただ、今日のディスカッションの中ではあまり触れられなかった点だと思うのですが、教養の内容にもジェンダーの偏りがあります。つまり、教養といったときに、誰もが思い浮かべる一連の作家、思想家、作品があると思いますが、こうした重要な人物や著作のリストには、大きなジェンダーの偏りがあります。つまり、私たちは今ある教養の中身を絶対化すべきではなく、ジェンダー的な視点から、あるいは階級や人種などの視点から批判的にとらえ直していくことも必要だと思います。ただ、今ある教養のスタンダードを批判的にとらえ直す力がどこから生まれてくるかという、やはり教養を身につけることによって、というところもあると思います。ですから、教養のあり方をも含めて批判的に物事を見ていく力として、教養は非常に大事ではないかと思います。

蔵田：「学校の勉強なんかしない」ということが教養主義の特徴だというお話が高田先生からありましたが、われわれ50代の男性——男性とあえて言いますけれども——には「学校の勉強なんかしないけれども、教養主義も嫌いだ」というメンタリティーがあったと思うのです。学校の勉強をするのはかっこわるいけれど、「おれは教養があるんだぜ」といった態度も気に食わない。國分さんの文章の引用にもありましたが、「やはり大学が何も教えないというのも違うだろう」という意識がありました。ではその後に何が残ったのか。学校の勉強なんかしない。しかし教養主義も批判しなければだめだ——すると何が残るのかということになります。そもそも教養の本来の意味は自分自身を因習から解放する、自分がどういう人間であるかを発見するということだったはずですから、そういう意味では教養の力はまだ残っているはずです。また、今回はあまり扱わなかったのですが、水溜さんのお話にもあったような「教養の大衆化」という点で教養が果たした役割も、ポジティブにとらえることができるのではないかと思います。

今日は長い時間、皆さんどうもありがとうございました。今回のシンポジウムについては、記録を残して、インターネット上でも公開したいと思っております。

それでは最後に、本学文学研究科の山本研究科長から挨拶をお願いします。

閉会の挨拶

山本：3人のパネリストの先生方、今日はどうもありがとうございました。またコメンテーターの水溜先生、ありがとうございました。

今日は最初から話を聞いておりましたが、大変刺激的でいろいろ勉強になりました。そこで、幾つか思い出すことがあります。例えば、啓蒙主義の話が今日は随分ありましたけれども、「道徳週刊誌」という有名な雑誌があって、そこに「学のある女性」という有名な挿絵があります。博士号を持った女性が家庭にいて、自分の勉強ばかりしていて家の中はくもの巣だらけ、だんなが自分で食事を作っていて、子供が裸で走り回っているという絵ですが、そういうことを批判するための挿絵なわけです。私は西洋史が専門なので少しお話しさせていただきますと、男女の役割

を「カギ括弧つきの科学的な根拠」で仮定していくという作業を、啓蒙主義の人たちは一生懸命やったわけですが、20世紀以降の多くの人たちがそこから解放していく役割を果たし、今もその途上にあるということを、皆さんの話を伺って改めて感じました。そして最後に、教養とは何かということを考えさせられました。

最近、北大でもそうなのですけれども、教養教育を復活させなければいけないと言われていいます。そうしたこともあって、教養とは一体何かということを私も日々考えています。今日はいろんなお話を聞きながら、新しい時代に向けての、今の時代における教養とは何かということを、教養主義ということを離れてぜひ考えていきたいと思います。そういう意味で非常に刺激的で多くの情報を頂き、3人の先生方に心から御礼申し上げます。また多くの皆さんにお集まりいただき、研究科を代表してお礼申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

閉会

蔵田：本日は長時間にわたり、まことにありがとうございました。センター関係者一同、心より御礼申し上げます。

本日は雪も積もっており足元が大変悪いので、お気をつけてお帰りください。ご来場、まことにありがとうございました。(拍手)



上段左から 今井順、柴田絵里佳、近藤智彦、瀬名波栄潤、増淵隆史（以上、応用倫理研究教育センター）
下段左から 蔵田伸雄、水溜真由美、平石典子、小平麻衣子、高田里恵子、山本文彦（敬称略）